資料１

これまでの主な意見・論点

◆ 主な論点

＜学力・人間力＞

○ 社会で活躍するのは学力だけでなくリーダーシップなどの人間力を持つ人であり、必ずしも学力と人間力は別物ではない。

○ 根性や柔軟性、創造性など、数字には示すことができなくても大事なことはある。地域での体験等を通じて見えない部分も大事にした教育が必要ではないか。

○ 基本的な知識やスキルの習得は大事だが、それを通して自分のものにして表現できる力がとても大事である。それが人間力、他者に対して自分の持つものを表現しながら知をつくるという、これから求められるものになる。

＜幼児教育＞

○ 5 歳児までにどんな力を身に付けるかで先に響いていく。5 歳児のときにできないことは大学生になってもできないので、幼児教育は重要である。

○ 不登校の大部分は小学校 1 年生から始まり、幼保小の接続が大切である。

○ 美的な感性を育てることが大切である。文書でも数式でも絵が浮かび上がることが普通であり、絵的な思考が人間としての力を付ける根底となる。文字や数字による思考の土台になる。

○ 家庭教育をうまく巻き込む仕掛けが必要。スマホやゲームを禁止しても勉強時間が増えるわけではない。自分で机に向かわせる努力が必要である。

＜投資と効果の関係＞

○ 教育投資に対する経済効果は小学校低学年までが大きい。費用対効果が高いのは土曜日や放課後学習である。

＜多様性の確保＞

○ 福井の学力・体力は子どもたちの同質性を前提に成り立っているところがある。他人との違いに誇りを持てるようにすることが多様性を生み出す。

○ 多様性・異質性をどのように学校現場に持ち込むかが課題である。

○ 福井の教育は次のステップに進もうとしており、結果が出ない時期があっても余裕を持つことが大事ではないか。

○ 福井の教育・授業研究を世界に発信するとともに、海外からの研修の受け入れなど、福井の学校のグローバル化を考えてはどうか。

＜教員・授業内容＞

○ 福井の先生は丁寧で熱心だが、子どもが立ち向かう力を育てているか。失敗させることも経験であり、どこまで手をかけるかを考えていくことが必要である。

○ 手取り足取り教える教育では、平均点は上がっても、自立して頑張る能力が低くなり、成長が止まる。手取り足取り教えることをやめることで、かえって自主性を育てることもあるのではないか。

○ 教員が全てやろうとするよりも、生徒自身に考える機会を与えることが大切である。一人ひとりが、自分で求め、考え、実行することが重要である。

○ 子どもたち自身も成長したいと思っているのは間違いない。その心を評価して、ほめてあげることを続けていけば、たくましい子どもができるのではないか。

○ 学校・学級の規模が小さくなると、小中学校では 9 年間固定的な関係が続くことになる。その中では異なる年齢層での共同学習などで多様性を担保することが大事である。

○ 生徒が減る中で、高校再編が必要になる。その中で特色ある高校をどうつくるかが課題である。

＜体験活動＞

○ 子どもの文化は子どもが自ら生み出ことが大事。創り出す力を育てるためには、自然体験や生活の中での実体験を増やすことが必要である。

＜ふるさと教育＞

○ これからは、福井のことを学ぶだけではなく、地域に出て実際に福井そのものをつくる学習も必要である。

○ 福井県内でも地域を担う人材が福井に集中している。人口減少社会の中で地域にどのように活力を残していくかということは福井県の中でも同じ状況である。